

# 伊豆山神社



伊豆山神社の神像。国の重要文化財です。  
神社にこのような神像が祀られるのは大変珍しいことです。  
この神像は人間の背丈以上の非常に大きなもので、  
その点でも大変珍しい。

これは2011年に修復に出される前のものでiGoogleのフリー画像です。

走り湯は、古代の三大温泉といわれているが、そもそも伊豆山神社と密接な関係があるし、役行者ゆかりのものでもある。今でこそ温泉の湧出量は激減しているが、古くは物凄い量の湯が濛々たる湯煙をあげて海へ激しく走り流れていたようだ。



では走り湯へ行ってみましょう。

[ここをクリック](#)してください！

伊豆山権現は、ちょうど走り湯の上にある。伊豆半島の根もと、海ぎわに迫った山の中であり、当時は、広大な領地と多くの僧兵をかかえ、めったに他人が足を踏み入れることを許さない構えをみせていたという。

だから政子はここに匿われたのですね。そして大姫はここで産まれたのです。明治の廃仏毀釈で別当寺が他に移されたし、関東大地震で建物がほとんど壊れたりしたので、今は、ほとんど当時の面影を残していない。無秩序に家やマンションやホテルが立て込んでい。きっと様変わりはいどいものなんでしょう。

なお、「走り湯」のすぐ上にある「逢初橋」は、初木姫が伊豆山彦と出会った場所といわれているが、政子と頼朝が久しぶりに出会ったという場所ともいわれている。どちらがほんとうか？ 政子が身を寄せていた館はその近くの「足川」だと言われているので、[「逢初橋」](#)は、政子と頼朝が久しぶりに出会ったという場所というのが本当だろう。

(註) 「逢初橋」は、熱海駅からバスで10分ぐらいのところ。  
走り湯は、「逢初橋」から海岸へ歩いて10分ぐらいか。

伊豆山神社には、走り湯を覗いた後、そこから通じている参道を行くと良い。参道は緩やかな階段がずっと続いているが、ゆっくりゆっくり登っていくと、まわりの雰囲気もいいし、何よりもしたの方の熱海のみが美しい。



お屋敷街の中ではあるが、周囲の景色を楽しみながらゆっくりゆっくり登っていくと、間もなく一番上のバス通りに出る。大鳥居のあるところだ。走り湯から上ってきた階段を振り返る。





ここからが便利なので、伊豆山神社へはここからお参りする人が多いようであるが、本来は、やはり下の走り湯から登ってくるのがいい。ここからでも結構の距離を登る。途中いろんな祠があるし、景色も良いので・・・ゆっくりゆっくり。途中の「役の行者堂」は、当然、役の行者との御縁によるもの。役の行者が伊豆の大島に流されいた時、時により、空中飛行をして、富士山や三峰山に出かけていたそう。ある時、飛行中、伊豆山の麓に噴出する「走り湯」を見つけて、そこで一時期修行をしたのだそう。かかる御縁から、伊豆山に「役の行者堂」がある。役の行者はなぜ伊豆に流されなければならなかったのか。そこが大問題だが、そのへんを御考え頂きながら「役の行者堂」をお参り下さい。





私は、「この国のかたち」・・・我が国のかたちというものは、縄文文化が底辺にあって形作られたものと考えている。そしてその一番の特徴は、「神仏習合」ではないかと考えている。これからあるべき「この国のかたち」としては、その「神仏習合」をさらに発展、成熟させて、キリスト教やイスラム教なども含めた「世界多神教」のようなものを理想として考えていけばいいのかも知れないが、長い歴史的過程を経て形作られてきた今の姿について限定的に言えば、「神仏習合」にいちばんの特徴を見出すことができる。

その「神仏習合」は、もともと修験道に色濃く結実しているように思われ、これからの我が国あり方に関連して、私は、修験道に大きな関心を持っている。修験道は、山の宗教であり、修行の場は山である。であるから、山好きの私にとって、修験道はひとつのあこがれになっている。次に紹介する「守れ権現」という歌は、「雪山賛歌」や「おまえは

そんなに何故嘆く」とともに、私たち山岳部の愛唱歌になっていて、山ではよく歌ったものだ。作詞は多分北原白秋だったと思う。今はとても懐かしい！

「守れ権現」

守れ権現 夜明けよ霧よ

山は命のみそぎ場所

六根清浄 お山は晴天

風よ吹け吹け 笠吹き飛ばせ

笠の紅緒は荒結び

六根清浄 お山は晴天

雨よ降れ降れ ざんざとかかれ

肩の着ごぎは伊達じゃない

六根清浄 お山は晴天

さっさ火を炊け ゴロリとままよ

酒の肴は山鯨

六根清浄 お山は晴天

山伏たちは小さな虫を踏むのも、また道の修理に鍬を振るうことさえも避けて、生命とそれを育む自然を大切にした。山に登り信仰が深まるにつれて、役の行者の偉大さが、次第に感得されるようになるようです。

修験道は、もともと私のあこがれでもあるが、「この国のかたち」に関連する私の重大関心事でもある。修験道の開祖は、役の行者（役小角えんのおずぬ）とされている。今年、役の行者が亡くなってから1300年ということで、全国各地でいろいろと「遠忌1300年記念行事」が行われるようである。私もできるだけ出かけたいと思っているが、今年は誠にいい機会であるので、是非とも、役の行者を少しでも身近に感じ、少しでも修験道に対する理解を深めたいものだ。

役の行者については、全国各地にいろんな伝説が残っている。しかし、その割には判らないことが多い。たいていは霧の中だが、私がどうしても知りたいのは、役の行者が何故伊豆に流されたのかということだ。その理由を知りたいと思ってきた。修験道でいえば神さんみたいな立派な人が何故伊豆に流されなければならなかったのか。いくつかの本も読んで私なりいろいろと考えてみたけれど、私にはどうもよく判らなかった。

しかし、梅原猛さんの「神々の流ざん（かみがみのるざん）」を久しぶりに読み返してみても、役の行者島流しの理由がやっと判ったのである。古い神々は出雲へ！・・・そして危険人物は伊豆へ！・・・ということであつたらしい。

梅原猛さんの考えによれば、大和の豪族は古い出雲族と呼んでいい人々であり、山を中心に古い神道によってその権威を保っていた。

宗教改革を行い、伊勢神宮（アマテラスオオミカミ）を中心とした新しい神道によって、中央集権的な律令国家を作りたいとする藤原不比等にとって、仏教が邪魔であるのは当然のこととして、その仏教と古い出雲族の宗教が結合し、神仏習合の新しい宗教が芽生えることすら邪魔であつた。早いうちにそういう芽はつみ取ってしまえ！それが時の権力者の考える当然の帰結であろう。

役の行者は、賀茂族の出身であつたらしいが、その賀茂族というのは、そもそも大和朝廷には根強い恨みを持っていたらしい。そのことは当然大和朝廷の警戒するところであり、大和朝廷は賀茂族に対し常に監視の網を張っていたようだ。



賀茂族は、出雲族の流れであり、いうまでもなく出雲族と同じ古い神道によってそれなりの勢力を保っていたようだ。したがって、役の行者がもし仏教を身につけたとしたら、それは自ずと古い神道と結合したひとつの発展形となる筈である。事実そうになった。修験道の開祖といわれる所以であるが、それは、賀茂族の動向とともに、大和朝廷にとってもっとも警戒しなければならない胎動であったにちがいない。

京都の上賀茂神社は、その頃すでに賀茂族の神社としてあったようだが、役の行者の島流しとほぼ時を同じくして、大和朝廷は上賀茂神社に対しある種の弾圧を加えている。

ちなみに、上賀茂神社と下賀茂神社の間に「出雲路橋」という橋がある。加茂川にかかっている橋だ。上御霊神社はその出雲橋のすぐ西側にある。その付近の古い地名は出雲路である。

出雲族に神々は島根に流せ！出雲族の危険人物は伊豆に流せ！そして賀茂神社には弾圧を加えよ！・・・それが不比等の方針であったにちがいない。新しい国づくりのためには、どうしても役の行者は伊豆の大島に流されなければならなかったのだ。



さあ、それでは伊豆山神社の境内をゆっくり見て回ろう！







二人がこの石の上に座ったかどうかは別として、頼朝と政子と一緒にこの伊豆山権現をお参りしたことは史実である。伊豆山権現に二人は何を祈ったのでしょうか。この時期まだ旗揚げなんてことは全くその気配がなかったので、少なくとも政子は子供の無事出産を祈ったのでしょうか。政子なかりせば、北条一族と頼朝との結びつきはなかった訳だし、そういうことを考えると、伊豆山権現は、頼朝旗揚げの原点はここにあるし、鎌倉幕府の幕府の原点はここにある。つまり、武家社会の源流はここにあるということだ。境内には、[由緒ありそうな石塔](#)があり、[御神木らしき巨木](#)もある。[山々の景色](#)、[海を望む眺望](#)が美しい。





伊豆山神社は一度は訪れてほしい。伊豆山神社から西側の道をたどっていけば、般若院に  
である。その付近から[伊豆山の全景](#)を見ることができる。これも実に美しい。般若院は、  
廃仏毀釈で今の位置に移されたが、本来は伊豆山神社の境内にあったものである。般若院  
の風格を想うと、当時の伊豆山神社が如何に壮大なものであったか、往時の様子が偲ばれ  
る。それでは般若院を覗いてみよう！

[\[格調高い本堂\]](#)

[\[本堂の立派な欄間\]](#) [\[本堂のきざはしも立派\]](#)

[石塔群に風情あり]   [境内のお堂]   [梵字の石碑も由緒ありそう]  
[美しい境内]   [見事な宝篋院塔]   [弘法大師像]  
[立派な鐘楼]   [釣り鐘もさすが]  
[それにしても粗末な庫裏]   [お地藏さんがいいですね]  
[道路際の石塔群も良いですね]

政子が出てきたところでいよいよ伊豆に参ろうか。

参ろう！ 参ろう！